

## 論文審査の結果の要旨

氏名：堀 川 佑 惟

博士の専攻分野の名称：博士（心理学）

論文題名：レズビアン及びゲイ男性に対する異性愛者の偏見に仮想接触が及ぼす効果—日本人大学生を対象とした検討—

審査委員：(主 査) 教授 岡 隆

審査委員：(副 査) 教授 羽 生 和 紀 教授 坂 本 真 士

本論文は、日本人大学生を対象にして、レズビアンとゲイ男性に対する異性愛者の偏見に彼らとの仮想接触が及ぼす影響を扱った社会心理学研究である。仮想接触とは、外集団の成員とのポジティブな社会的交流のメンタル・シミュレーションと一般的に定義されており、本研究では、異性愛者がレズビアンまたはゲイ男性とのポジティブな交流を想像することによって、彼らに対する異性愛者の偏見がどのように変化するか、そして、どのような要因がその変化を規定するかを、4部構成で研究1から研究10までの10の心理学的な調査と実験を通して解明しようとしている。

本論文の第I部では、研究1から研究4までの4つの研究を通して、異性愛者の日本人大学生がレズビアンとゲイ男性に対して持っている偏見やステレオタイプの強度や内容を明らかにしようとしている。研究1では、異性愛者の日本人大学生が、レズビアンとゲイ男性に対してネガティブな偏見を持っており、その強度が黒人や精神疾患患者などの他の社会的マイノリティ集団に対するのと同程度であることを確認している。研究2と研究3では、レズビアンとゲイ男性に対する態度を測定するための、標準化された日本語の尺度がないという現状を踏まえて、世界的に標準的に使用されている尺度(Attitudes Toward Lesbians and Gay Men Scale; Herek, 1988)の日本語版を日本で初めて作成し、その標準化を通して信頼性と妥当性を確認している。研究4では、異性愛者の日本人大学生がレズビアンとゲイ男性に対して抱いているステレオタイプの具体的な内容を検討して、日本と欧米との間でその内容の異同を明らかにしている。

第II部では、研究5から研究7までの3つの研究を通して、レズビアンに焦点を当て、異性愛者の女性大学生を対象にして、レズビアンとの仮想接触の効果を明らかにすることとあわせて、研究8では、その仮想接触の効果の、他の社会的マイノリティ集団への一般化可能性を検討しようとしている。研究5から研究7では、異性愛者の女性大学生が、仮想接触の実験操作として、初対面の女性同性愛者と2人で休日にポジティブでリラックスして心地よい交流をしている場面を想像し、その内容を用紙に書き出すよう求められている。その後、レズビアンに対する彼女たちの集団間不安、現在の態度、潜在的態度、対人距離が測定されている。研究計画や実験手続きにいくつかの変更を加えた3つの研究で、レズビアンとのポジティブな仮想接触を行うと、レズビアンに対する顕在的態度が好転したり、レズビアンに対する対人距離が縮小したりするという結果が得られている。この結果の一般化可能性を検討するために、研究8では、異性愛者の日本人大学生が、レズビアンに対するのと同程度にネガティブな偏見を持っている精神疾患患者を対象にした仮想接触の効果が検討されている。この研究では、日本人男女大学生が精神疾患患者とのポジティブな仮想接触をすると、精神疾患患者に対する彼らの集団間不安は低減するものの、彼らの潜在的態度が悪化することが示されている。レズビアンに対する仮想接触の効果と精神疾患患者に対するそれとが異なり、この両者が反対の効果をもたらすことについては、それぞれの社会的マイノリティとの仮想接触におけるポジティブな交流の想像のしやすさという観点から考察され、その想像が容易であるときには仮想接触のポジティブな効果が得られるが、その想像が困難であるときには仮想接触の逆説的效果、すなわちネガティブな効果が生じうるといった新たな仮説が提唱されている。

第III部では、研究9と研究10の2つの研究を通して、仮想接触の効果を左右する要因が検討されている。研究9では、第II部の最後に提案された仮説が検討されている。異性愛者の男性大学生が、ゲイ男性とのポジティブな仮想接触をするよう求められているが、その仮想接触の交流内容が想像しやすい条件と

想像しにくい条件とが設けられている。予測通り、この研究では、仮想接触の交流内容が想像しにくいときには、ゲイ男性に対する集団間不安が上昇するという逆説的効果が確認されている。研究10では、拡張された仮想接触の効果が検討されている。具体的には、これまでの仮想接触の研究が、社会的マイノリティとの一対一の仮想接触を扱ってきたのに対して、研究10は、現実の社会のマジョリティーマイノリティ関係を反映させた多対一、すなわち、自身を含む複数の異性愛者の女性大学生が一人のレズビアンとポジティブな交流をするという仮想接触を扱っている。この研究では、予測に反して、多対一の仮想接触によって、レズビアンに対する集団間不安が悪化することが示され、今後の研究の可能性が示唆されている。

第IV部では、研究1から研究10が要約され、本論文の意義と限界、今後の課題が述べられている。

本論文は以上のように、10の実証的な研究を通して、日本においてレズビアンとゲイ男性に対する偏見やステレオタイプの強度や内容を明らかにするとともに、レズビアンとゲイ男性に対する仮想接触の効果、およびその効果を左右する要因を明らかにしている。本論文は、次の2つの点で特に高く評価できる。第一に、日本においてレズビアンやゲイ男性など性的マイノリティに対する対人認知や対人態度に関する実証的な心理学的研究がほとんどなく、この分野の心理学的研究で日本が世界に後れをとっているなか、世界的に標準化されてきた尺度について、その日本語版を作成し、その標準化を通して信頼性と妥当性を確認していることが高く評価できる。第二に、仮想接触の効果を左右する要因が、これまで体系的な研究がなされてきていないなか、その研究に先鞭をつけ、これまで報告されたことのない逆説的効果にまで言及し、その生起を規定する要因を明らかにしていることが高く評価できる。ただし、レズビアンやゲイ男性などの性的マイノリティに関する、日本における標準化された科学的な心理学的研究が多くないなか、本論文に収録された実証的研究の再現性問題を含めて、本論文にはさまざまな課題があることは否めない。しかし、課題があるということは、今後の研究に期待できる場所も大きいということである。

以上の成果は、社会心理学領域における学識の深さと新しい心理学的研究を遂行する能力の高さを示すものであり、申請者が専門的な職務に従事するための十分な資格を有していると判断される。

よって本論文は、博士（心理学）の学位を授与されるに値するものと認められる。

以 上

令和元年12月20日